

ベトナムのすゝめ

連日真夏日が続き、セミが元気に大合唱する季節に、私はゼミナール（以下、ゼミ）の調査旅行のため、夏休みに6人の仲間と担当教員の出雲先生とベトナムへ飛んだ。

調査旅行の目的は2つ。一つはベトナムで事業を展開している日系企業を調査訪問すること、もう一つは有機農業普及を目指すセンターを訪問し、自ら農業を体験することだった。なぜかというところ、私の所属する経済学部の出雲ゼミは、12月に控えた全国日本学生経済ゼミナール大会に向けた共同論文を作成している途中で、実地調査の資料を必要としていたからだ。

8月21日（日）、成田空港を朝10時に経ち、6時間ほどでベトナムのタンソンニャット空港に着いた。ターミナルを出ると、先生のお知り合いのトー・テュアンさんの奥さんや娘さんが笑顔で出

迎え、軽く挨拶をした後に、お家まで案内してくれた。この空港は隔離された日本の空港とは違い、ホーチミンの街の中に設置されていて、歩いてタクシー乗り場を抜けると、そこはもうベトナムの人々の生活空間だった。トー・テュアンさんのお宅で早めの夕飯をいただき、英語や日本語を交えて談笑した。3時間か4時間ほどお邪魔した後タクシーに乗り込み、その日はホテルで休んだ。日本とそんなに気温が変わらなかったため、疲れは出なかった。

私たちが8月21日〜26日の間宿泊していた場所は、ホーチミン市の中心部に位置する。「Beautiful Saigon」という名前のホテルだ。1階はレストランになっていて、従業員はみな私たちと変わらない年齢でも優しくしてくれた。フランスの植民地時代があったベトナムだけに、ホーチミン市



ベトナム名物バイク集団



この道沿いの店でご飯を済ませる人が多い

外国語学部
国際文化交流学科3年

藤倉 遥

内にはフランス様式の建物が目立った。

ベトナム2日目の8月22日はホテルのレストランで朝食を摂った後、予め予約してあった貸し切りの小型バスに乗り込み、ベトナムで事業展



beautiful saigon2の1階レストラン

開をしている日系企業の「ヤクルト」に向かった。ここでは4人の日本人と約40人のベトナム人が従業員として働いている。訪れる建物は工場だと聞いていたので、到着したとき、まるで日本のオフィスフロアのような様相に私たちは面食らった。すでに会議室の中にはリーフレットやヤクルトが用意されていて、説明用のパソコンもセッティングできていた。「ここにはよく学生が見学に来るんですよ。ベトナム人がほとんどで、小学生から高校生まで来ています。1年に500人〜1000人です。」社員の方の手際の良さに納得だった。ヤクルトは日本でそのブランドを確立した乳酸系飲料の商品名であり、それがそのまま企業名となっている。2004年までの40年間で17カ国に

進出した実績を持ち、アジアの先進国では有名な企業だ。しかし、ベトナムにはそもそも「乳酸系飲料」という製品自体が存在しておらず、ベトナム進出はその概念を現地の人々に説明するところから始まったという。「ホーチミンなどの都市では、近年ヘルシー志向が高まってきています。しかし、私たちの製品は知られていなかった。なので、まずベトナムに住む外国人に的を絞ったんです。」ベトナムに住む外国人の6割は韓国人。すでに韓国ではその名が知れていたヤクルトは、外国人が多く住む町の小売店に置かせてもらうことにした。最初はヤクルトを置くことを渋っていた小売店も、思っていたより売れ行きがいいことに驚き、翌日にはもつと置かせてくれと電話をかけてきた。何度か、保険省（日本の厚生労働省にあたる）が商品の販売に際して難癖をつけてくることもあった



ヤクルトの1階ロビー、奥が所長

そうだが、少しのお金を払えば事はスムーズに行くのだ、という話も聞いた。未だそういったことが：不安な気持ちと、日本では見られない開けっぴろげな役員の態度を、面白いと思う気持ちとが交錯し、私は曖昧な表情でこたえた。場内はとても清潔で、いたるところに見学者用のモニターや乳酸菌を見る顕微鏡があり、「開かれた会社」というイメージが強く残った。それは「菌を扱う会社」としての責任を表しているかのようだった。

ヤクルト工場の次は東遊日本語学校へと移動した。全部で5つの校舎を持つ大きな日本語学校で、学習者は約2000人と多い。校長秘書の方の計らいで日本に留学する予定の生徒たちと、昼休みに話ができることになった。そのクラスは約40人。高校生くらいの男の子と女の子が青と白の制服に身を包み、興味津々といった様子でこちらを見ていた。私たちは教室の各場所に散らばり、それぞれ日本語で会話をした。「こんにちは」「お名前は？」照れ屋な彼女たちはだんだんとお喋りになり、「もう市場には行きましたか？」「このクレープは美味しいですよ」とホーチミンの若者情報をたくさん教えてくれた。その後、教室の後ろで彼らの授業の様子を見学させてもらった。指導しているのは男性のベトナム講師。前の授業の復習が終わると、講師からのベトナム語での説明を受け、生

徒たちは教科書を一齐に開き、隣同士でディスカッションを始めた。「今は慣用句の意味を考える時間です。」手が空いた講師が説明をしてくれた。あまりにも流暢な日本語だったので、ゼミ生の一人が「あなたはベトナム人ですか?」と聞くと「私は4年間日本にいました。ベトナム人ですよ。」と笑った。私はその誇らしげな表情を見て、夢中になつて話しかけてきた生徒たちの顔も思い出しながら、「夢がいっぱい詰まった、素敵な場所だなあ」と感じた。

3日目にはもう一つの日系企業、ACECOOKに行つた。言わずと知れたインスタントラーメンの会社で、その土地の購買層に合った味を開発・提供している。前日のヤクルトと違った点は、社員の方全員がスーツをビシッと着こなしていて、さ



中央後ろ ACECOOK の社長さんは、なんとこの日が誕生日だった!

ながら「会議」のような雰囲気だったことだ。緊張したが、たくさん質問をしている間に雰囲気が和らいできた。

インスタントラーメンというのは健康の面でもうしても印象が悪い。ベトナムでも同じことで、売上を上げるため、ACECOOKは緑豆を使った麺や、元来ベトナム人が好きな米の麺も販売しているという。「ですが、春雨や米の麺はドライ麺で、小麦のフライ麺より価格が高くなってしまうんです」しかし売り上げはあまり落ちないという。何故か。「はつきりとは言えませんが、最近のベトナム人の親は何でも子供に買い与えてしまふんです。ジャンクフードもインスタント麺も、子供にあげてしまうのでしよう。また、ベトナム人には陰と陽の精神があるように思います。今日は体にいいものを食べたから、明日はジャンクフードを食べても大丈夫、というような」また、ACECOOKではベトナム人労働者を積極的に採用している。ベトナムの国内でも味を変えて販売しているのだが、なんと、その味を作る商品開発部の職員もベトナム人だという。現地の視点・文化で考える、という姿勢に、日本企業の強さを感じた一方で、月給15000円で懸命に働く工場作業員を見ながら、日本の空洞化を食い止めることはベトナム人の雇用を削ることになるのだろうか、と複雑な感情が湧きあがってきた。

4日目にはタンソンニャット空港から、小さい飛行機に乗り込んでバンメトートに移動した。バンメトートはホーチミンから飛行機で1時間ほどのところにある田舎町で、ここに日本のNPO法人と連携した有機農業センターがある。外に出ると、小さなロータリーでバイクに乗った2人の女性が私たちを待っていた。ThaiさんとChauさんだ。彼女たちはセンターの卒業生で、日本語を習っていたため、案内を引き受けてくれた。その日はホーチミンよりも涼しいバンメトートの風を受けながら、外と一続きのレストランで宴会のようにわいわいとご飯を食べた。

5日目の朝は7時に、外で鳴く鶏の声で起床。Thaiさんたちが迎えに来て、共に「安全野菜組合」(Thaiさんがこう訳してくれた)に向かった。現

地に着くと片山さんがバイクから降りて待っていた。片山さんは愛媛県にある有機農業センター「無茶茶園」の代表であり、ベトナム人の若者に日本で農業の実地訓練をさせることを目的としたNPO



安全野菜組合の事務所



組合員の農場施設見学、質問



THANG LOI COFFEE のコーヒー農園。
道とコーヒーを隔てているのは胡椒の木

団体と連携して、ベトナムの有機農業センターを運営している方だ。今回は有機農業の他団体を見学する、ということで見学する。

平屋建ての小さな部屋で、組合の副所長のダムさんが私たちを出迎えてくれた。話を聞くと、まだこの組合は2年前に国の農村開発局から認証をもらったばかりだと言う。ベトナムは社会主義国なので、政府の援助があるのとないのでは、だいぶ違う。「認証をもらってからは、ベトナム政府がビニールハウスや新事業の提供をしてくれるようになりました。」3年に一度組合申請をしなければならぬのは面倒だが、この役割は大きい。組合を作った目的は、いままですれぞれが習慣で作っていた農作物に対しての育て方（肥料の作り方）を教えること、農家同士の意見交換の場を設けることである。今では30の農家が協力し、運営している。



後ろ左から3番目が片山さん、向かってその右が THANG LOI COFFEE の社長、その右が出雲先生

私の胸に残った言葉は「一番の悩みは売れないこと」だ。特に、規格外の野菜ばかり食べていた田舎の人たちの意識を変えるのは難しいだろう。

その日は午前中に安全野菜組合員の農場を見学に行き、午後にダクナン省で最も有名だという THANG LOI COFFEE の広大なコーヒー農園を見て回った。

夕方になり、心待ちにしていた有機農業センター（以下センター）に向かった。私たちがこの農園を知ったのは、出雲先生にご紹介いただいたことが



農園の風景

きっかけだった。出雲先生は片山さんを講師として招き、神奈川大学で講演をもらったこともある。何年か前からゼミでベトナムへ行くようになった目的は、センターで日本語を学びながら農業をしているベトナム人の若者たちと触れ合うことで、彼らの日本語の勉強に刺激を与えることができるかもしれないという、先生や片山さんの期待もある。また、私たちも違う国で育った同世代の人たちから、何らかの影響を受けることを期待していた。

一度センターに足を踏み入れたら、私たちもその一員として行動しなければならぬ。ある日は農場で照りつける太陽の下で、3人がかりで1時間かけて草ぬきをしたが、小さな畝2つ分しか終わらなかつた上に、腰が痛くなって日焼けがひりひりと痛んだ。農薬を使うと、農薬が浸透して作物に影響を与える。わかっではいるが、有機栽培の大変さを身に染みて感じた。だが一方で作物にたいしての愛情が湧き、毎日世話をしていたら、可愛くてしょうがないだろう、などと思った。センターだけに留まらず、彼らが実際に働いて



ベトナムの遊びを練習中

いる場所、彼らの家族、仕事の内容を見たが、どれも自然との共存を大切にしている素晴らしかった。あえて自然に根ざした形で健康にいいものを作ろうとする人たちが、進みすぎた農業文明に対抗するのは難しい。いや、農薬が使われるようになったこの社会から、更なる進化をして有機農業が始まったのかもしれない。

バンメトートに滞在していた6日間、私たちはほぼ毎晩センターで夕飯を作った。初日はセンターの卒業生たちがたくさん集まり、一緒に料理をし、できあがった日本料理を食べたが、二日目以降は



センターの番犬たち「ふらふらしていると捕まえられる人間に食われてしまうんだよ。だからちっこい犬も買うんだ。食べるとこなさそうやろ。By 片山さん」



草ぬき、右が Thai さん

お互いの国の料理を作りあった。煮物、ハンバーグ、カレーライス、スパゲティ、天ぷらそば、ベトナムのスープ、春巻きなど。特に、隣の農園で収穫した野菜やバナナを使った料理は格別だった。通じ合える言語は日本語が主だったが、食後に歌を歌い、ベトナムや日本のゲームをし、これからやりたいことを話した。日本人、ベトナム人というよりも一人の人間として向き合うことができたのはとても嬉しかった。

バンメトートでは農作業の手伝い以外に、ThaiさんとChauさんが観光に連れて行ってくれた。



みんなで料理! 一番手前が Chau さん

記念碑の前で写真撮影をしたり、公園を巡ったり、市場を見学してアボガドを買ったりした。バンメトトは田舎の町で、ホーチミンに比べたら観光名所は少ないが、その分、町の人たちの暮らしが見えた。たとえば、



スープにつけて食べるゴマせんべい

大衆食堂では後から缶を数えて飲み物の勘定を出すこと、同じく食堂で落花生を売りに来る子供たちにご飯を分けてあげるのが普通なこと、犬が首輪もせずに歩き回っているのが当たり前なこと、夜に野菜市が開かれること、バスの座席はクッションがはがれていても平気なこと、トイレには紙が置いていないこと…。外国人向けに変化してしまった都市部とは違い、一種の「ベトナム人らしい生活を感じる」ことができた。

「遥さんは何になりたいですか。」Thaiさんにある時間かれた。「日本語教師になりたいです」と答えた私に対して、「私もです」というThaiさんに驚いた。海外の非母語話者教師は知っていたが、農業をしているThaiさんの印象とはかけ離れてい

たからだ。「日本語教師になって、センターの人たちに日本語を教えたいです」まさか、ベトナムに来て仲間ができるとは思わなかった。それからどんな日本語の勉強をしているのか見せてもらったり、ゼミ生の名前の漢字を教えたりした。別れは非常に明るいものだった。「さようなら！ また！」小さな空港でゲートを抜けた後もみんな手を振りながら、泣いたふりなどでふざけ合っていて笑いあった。また、きつと会いに来るだろう。



フルーツを剥いて売るおばちゃんが、よく移動式の店を引いて歩いている

今回の旅行で、私は自分の価値観と先入観を見直さなければならなかった。ベトナムにネットカフェがあることに驚いたり、逆にトイレトペーパーがないことに面喰ったり、自分の「当たり前」が見事に覆された。また、ベトナムに出発する前には「現地の日本語を学んでいる人たちに、私が教えるんだ」と意気込んで行ったものの、私が彼らにしてあげられることは、正しい日本語を教えることなどではなかった。その答えはわからないが、きつと友達になることだったのだと思う。今になってあの楽しい日々を振り返ると、なぜあんな上から目線で見ていたのだろうと恥ずかしくなった。今回の旅で自分の未来の目標が明確になっただけでなく、少しだけ視野が広がった。選択肢は一つではない。また、自分の口に入るものを自分で選ぶといった作業を、どれだけしていなかったかを知って反省した。どのように日本の農家を守るのかも、これからの未来を担う私たちの課題だろう。世界で見た日本の立ち位置、役割、それを踏まえた上で自分たちでできることを考えていこうと決心した。